

八月三〇日

夏も終りだ。四季がある事は様々に自然の移り変りの相を見せてくれるのだが、チョッとせわしい気もするな。砂漠の連中の時間の観念と我々とは随分違う世界なんだろうと思う。今日は、どこかで時間を割いてダム関係の本を二冊読んでしまわなければならない。午後は大学に行つて明治通りのビルをどうにかしたいという人に会う。少しばかりコンヴァージョンのプロジェクトが動く気配があり、心強い。情報の出入りが多くないと仕事は動かない。今夏二度目新宿から大学までバスに乗ってしまった。歩かなくなつたらおしまいよ、というのは解っているんだが、ついついフラフラと足がバス停に向つてしまった。私が悪いのではない。足が悪いのである。昼食後丹羽と自転車の件。これは明治通りのプロジェクトと結びつく筈だ。

十五時三〇分明治通りのプロジェクトに関心を持つ商社の方二名来室。十七時過世田谷に戻る。只今二十二時。世田谷地下は悪戦の連続である。仲々出口が見えない。少しでも光を一刻も早く視たいものだ。兵がキチンと動いてくれぬと闘いにもならぬ。育ちが遅過ぎる気もするなア。

室内「目ざわりデザイン」連載二十二回目はダム堤防をやるが書くのには準備がある。今夜は下調べである。この連載も仲々大変な仕事になってきたが面白い。若い時の不勉強が今頃になつてひびいてくる。

今日は十七時から海光、住宅建築編集の女性と、最終のインタビューがあつた。私の仕事と住宅建築という雑誌の相性はともかく、あとは海光とあの頑張る女性に任せるしかない。ゲラで一部見た藤塚光政の写真が非常に良かった。人間を外さずに、入れてしかもズルズルの生活臭の嫌味も無く。人間と建築が5分5分の関係になつてゐる時を撮つてゐる。自然と建築との関係も然り。空の状態つまり雲の姿と建築とがよい状態で合体している時を撮つてゐる。決して建築だけが主役ではない。人間と自然が居て、そしてあつて、その狭間に建築があるという状態が写真になつてゐるのだ。写真とは要するにその瞬間、瞬間の気配の記録である。百分の一とか五百分の一秒の時間の中で写真家はその時を、大げさに言えば歴史化しているわけだ。大仰に言わずにおけば、その一瞬の偶然を凍結する作業をしている。だから写真家はその時々々の偶然を最大限に写真にとり入れる才を持たねば駄目なのだ。

考えても見たまえ。パルテノンンの姿形を撮つた写真に空が写つていないものは無いだろう。ギリシャの空は日本の空とは違つて、光、湿り気、要するに空は抜けるばかりに青いだけで雲があんまり出現しないというギリシャ的特性がある。パルテノンンの背景に入道雲や、筋雲が写つてる写真を見た事があるかね。あるのかも知らんが、記憶としては無いでしょう。ギリシャと言うよりもアクロポリスの丘はいつも私達にとっては抜けるような深い青空なのだ。誰かが言つていたように、戦後の焼跡、私達の記憶にスレスレに残つていそうな廃墟に特有な深い、底知れぬ深さを持った青空であつた筈だ。東京の空は違つて、東京には戦後の焼跡の記憶はもう残つていない。ピーカンの青空はあんまり似合わない。アジア、モンスーン地帯の端だものね。やっぱり雲がなくては地理的特性が表現できるわけもない。偶然の恵みもあつたわけだが、

藤塚の写真に大きく雲が、しかも丸みを帯びた雲の群体が撮り入れられているのは良かった。藤塚が時の女神を味方にして、この場所の特性をよく表現し得たと言う事なのだろう。世田谷村も杉並の渡辺さんの家も、自然の恵みが無ければ成立しない建築である。その事にこれらの建築の実ワ、ほどほどの価値がある。それを藤塚は良く表現し得ている。人間と雲や草木は動くけれど建築は動かない。光と影は動くけれども建築は動かない。動くもの達があつて、初めて建築は建築たり得るのではないだろうか。あるいは建築が環境という概念に包含されてゆく現実は、その事の本質にあるのではないか。建築は、人間と自然あつてのモノだという考えに、さらに言えば歴史あつてのモノなのだという考えに少し軸足を移してゆく必要があるだろう。

チヨツと大仰な話しになつてしまつたが、とに角、藤塚の写真は良かった。いつか建築写真論をキチンとやらなきやいかんなコレフ。

八月三十一日 土曜日

今、朝の五時前、ダムの本を読んだり、このメモを記している内にこんな時間になつてしまつた。今日は毛綱の一周忌とクライアントの岡さんに会う用件がある。徹夜してしまつたらキツそうだなあ。十一時武蔵境南口毛綱宅。二〇名程の人間が集まり毛綱の一周忌。その後深大寺で昼食。六角藤塚他毛綱の友人達が集まつた。毛綱の母親のお別れの言葉。「皆さん死んじや駄目です。死んでしまつたら冷たくなって、口もきけないんだから。どうぞ、体を大事にして下さいよ。」

確かにそうなんだけれども、どうしたら体を大事に出来るかが解らないのが本音だ。カンカン照りの昼で、毛綱の玄關脇のさる

すべりの樹の二双振り、ピンクと白の花を咲かせている樹がそのツインの有様が何となく毛綱みたいであつた。毛綱の気持が樹に乗り移つたのだろうか。毛綱の家は普通の木造の平家で何の変哲も無いのが良かった。庭に広いテラスを張り出し、庭の野菜その他とうまく合つていた。これが毛綱の本音かな。

十五時三〇分皆と別れて武蔵境駅北口のコーヒーショップでフラッペをかじつて涼む。

岡夫妻岡山の弟さん、彼は医師なのだ、と御一緒に武蔵境の物件を見に行く。この物件は三〇年程も昔、私がダムダンつていうチームを作つたばかりの頃手掛けたもので、実に小さな集合住宅である。それがそろそろ

設備その他に老朽化の不都合がでてきた。建て替えるか、リニューアルするかを決める為の下調べだ。三〇年前の自分達の作品をどう生かせるかがポイントでもあろう。どうやら身近なところで近代建築の再生のケースが浮上してきている。下調べの後、国分寺の岡さんの家で打合わせ。岡さんの家は私の研究室で設計したもので、きれいに使つていただいているようで嬉しい。庭のアカシヤが大きく育つていたのでかみきり虫にやられて、残念だと言つていた。我家は空に浮いているので庭との関係は希薄だが、岡邸は庭と共にあるので、一本のアカシヤの有無は大事なのだろうな。打合わせ後、駅近くの寿司屋で夫妻弟さんと食事。弟さんは岡山県医師会会長であつた事を知る。依頼主はやはり豊かな階層の方が建築家は楽だなあと考えながら飲む。二一時過世田谷村戻り。地下では十勝二期計画の模型作りが続行中である。何だか今日も疲れた。友人をしのぶ会とこれからの仕事の件が午前、午後に併存したから、過去と未来が武蔵境駅南口、北口で隣り会つたんだから、これはマア、疲れるのも仕方ない。

九月一日 日曜日

九時前起床。まだ眠い。昨夜の疲れ方は異常だった。毛綱の霊が背中に貼り付いたかと思う位に。午前中何も出来ず。地下での模型作りを少し見る位。午後三時前まで眠さが去らず、しかもベターッと何かに引きづり込まれるような眠さで、悪夢が断片的に訪れた。夕方十勝ヘレンケラー記念塔第二期工事の模型作り終了。長女徳子長かったアメリカ留学から帰国。御苦労さん。しかしながら、PHD取得後のこれからが大変なんだよね。